
前略、堀の中から

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前略、堀の中から

【著者名】

伊達倭

N9503B

【あらすじ】

世紀の大泥棒が獄中で、読書にハマった。彼は、何故か己の道が筆であることを見出していくのだが……

実にくだらない理由で、世紀の大泥棒、高柳昌彦はお縄についた。どんな鍵でも五秒で開けて、最新式のセンサーなんぞモノともせずに。ある時は宝石を、またある時は札束を、実に鮮やかな手口で盗み取つた。仲間内からはヤナに盗めぬモノはなしと謳われ、警察は影を踏むことさえできずにいた。

そんな高柳が逮捕されたのは、ラブホテルの一室だつた。男前の高柳は女の心を盗むのも得意だつたのだが、婦警さんのハートを盗んだのがいけなかつた。宵越しの銭は持たない、江戸っ子の高柳は婦警と会つ前に銀行の金庫から盗み出した一千万円を、一発力マシた後に「遊びつてわけじやねえけど」なんて格好をつけて言つて、千渡してしまつたのだ。

尋常ではない手管にすっかり骨抜きにされた婦警だつたが、一千万円を見た途端、立たぬはずの足腰を職務への執念により動かし、先ほどまで己の身体を戒めていた縄で高柳を縛り上げた。大金を前にすると喜ぶよりも驚くよりも前に、事件だと決めつけた美人婦警は警視総監殿直々に表彰されたのだが、近づく男はいなくなつた。

かくして高柳は文字通りお縄についた。あんまりにも情けない捕り物劇に高柳はすっかりふて腐れていたが、銭形警部そつくりの刑事に取り調べを受けている途中、敬愛するルパン三世も似たような失敗をよく繰り返していることに気づいて、刑務所に放り込まれる頃にはすっかり機嫌を直していた。

執行猶予のつかない無期懲役を食らつた高柳だが、とりあえずいつでも逃げ出せるので、折角の刑務所生活を満喫することにしてみた。何故なら、敬愛するルパン三世もたまに刑務所で縞模様の囚人服を着て笑つていたからである。

しかし、刑務所の夜はべらぼうに長かつた。愛読書であるルパン

三世はぼろぼろになるまで繰り返し読み、相部屋だったヤクザに今まで踏んできた事件のあらましを説明して、最後に抱いた婦警を思い返しても、まだまだ時間は余っていた。

「暇なら読んでみたらどうだ。意外に面白いぞ」「相部屋のヤクザが暇つぶしに勧めたのは、ハードカバーの分厚い小説だった。

本と言えば漫画。しかもルパン三世しか読まぬ高柳は丁重にそれを断つたのだが、三日もすれば暇で発狂しそうになつたので、抜け出そうとしたのだが、如何せん世纪の大泥棒に対するガードは堅い。四六時中監視する看守に辟易しながら、渋々ハードカバーの小説を読んでみることにした。

結果から言うと、分厚いハードカバーはルパン三世を十回読み返すよりも時間が潰れ、今まで感じたことのない感動を高柳の胸に与えた。

「よければ、他にもあるが」「貸してくれ」

ヤクザは何故かクソ甘い恋愛小説から、哲学書まで幅広いジャンルの本を所持していた。何と言つことはない、長い懲役を受けたこのヤクザは刑務所の中での暇潰しに、本がとてもなく有効であることをよく知つていたのだ。

高柳はすっかり本に魅了され、そのうち、抜けだそうと思ついたことをすっかり忘れた。ヤクザの持つてきいていた本を読み尽くして、もう一度読み返そうかと思っていたところに、弁護士がやって来た。頼んでもいいのにやつて来た国選弁護士である。

「印象をよくするために、反省文を書くべきでしそう」

それで高柳はようやく自分が懲役者であることを思い出した。しかし、本を読めるのだから懲役を食らつたままでもいいんじゃないかと、素敵な理論展開をかました。

高柳の態度を、自分の犯した罪を全身で償おうという姿勢に取つた弁護士は、若くて熱血であった。反省しきつた世纪の大泥棒に、

せめてゆとりある獄中生活を営んでもらおうと、弁護士は紙とペンを用意した。

「せめて看守の見張りを無くしたいでしよう?」

弁護士の提案は高柳の意に沿つ物であった。高柳は人に見られながらの読書は気が散るものだな、と曲解したのだが。

かくして高柳は中学校以来、一度も取り組まなかつた作文という作業に取りかかつた。

最初は嫌々であったが、驚くことに筆はすらすらと進み、内容も世紀の大泥棒と言うよりも、根っからの小市民が書いたようなものだつた。悲壮感に溢れ、人情に訴えかける会心の出来であった。高柳はこの反省文に酔つた。俺は実は泥棒よりも小説家のほうが向いていたのだと、驚異の勘違いをした。

ただ、彼にとつて幸か不幸か、その勘違いは、あながち勘違いではなかつたようである。四六時中の監視は取り消され、ゆっくりと読書を楽しむことが出来るようになった。ただ、高柳は本よりも、紙とペンを所望した。

本に魅せられ、今度は執筆に魅了されたのである。

じつなると囚人ほど有利なものはない。取り敢えず囚われの身ではあるが、簡単な作業さえしていれば後はヒマである。飯を自分で作る必要もなければ、風邪で倒れても面倒を見てくれる。外に出ることは出来ないが、出る気がなければこれほど快適な場所は、探しても見つからない。高柳はヒマな時間を執筆に費やすことにした。

「最初は短い物から書くといい。書けたら見てやる」

相部屋のヤクザはこれ以上ない理解者だった。何でも、ドンパチで相手のヤクザの親分をピストルで蜂の巣にしたとかいう、とんでもねえ肩書きで刑務所にやつて来たらしが、今ではただの読書好きの中年である。娑婆の読書家の十倍暇な塀の中のヤクザは、娑婆の十倍は本を読んでいるのである。

最高の環境と最大の理解者を得た高柳は覚えたての猿よろしく、思いつくままに筆を走らせた。筆が暴走することもしばしばで、甘つたるい恋愛小説を書いていたつもりが、謎が謎を呼ぶ推理小説になってしまっていることもあった。

「ヤナさん、まだまだ足りないな」

高柳の習作を読んだヤクザは顎をさすりながら呟いた。

「何が足りないんだ？」

己の才を貶された気がして、高柳はやや声のトーンを下げて尋ねた。ヤクザは高柳のそんな仕草もお見通しらしく、にやりと笑った。「全然、読書量が足りない。もつとたくさん本を読んでみるんだな」「かなり読んだぞ」

「まあ、そんなに尖らないで。騙されたと思つて適当に一冊読んでみろよ。きっと面白いことになるから」

高柳は自作にケチをつけられたこともあってか、自分の才能がヤクザの手の届かないところにあると決めつけた。途方もない勘違いである。

しばらく高柳はヤクザの言葉を無視して執筆を続けたが、一週間もすれば行き詰まり、散々苦心した挙げ句、手近にあった一冊の文庫を手に取つた。息抜きのつもりだったのだが、ぱらぱらとページを捲るうちに、妙なことに気が付いた。内容に見覚えがあるので、既に読了した本であるはずなのに、この前読んだ時とはまるで印象が違う。内容を追うことに精一杯だったのが、所々に溢れる文章の微細に気付いたのである。

「どうだいヤナさん、俺の言つてること、わかつたかい？」

「ああ、まだまだ足りなかつた」

ヤクザの言葉は真実だった。单なる読者と曲がりなりにも執筆をしている人間では、文章の読み方がまた違う。特に二度目に読む時は、かなり大きな違いになる。高柳は己の傲りを知り、ヤクザに謝り、再び本を読み漁り始めた。

一度火がついた暇人は本当に見境がない。こと、倫理観なんぞ完

璧に無視して、ルパン三世を人生の師とまで仰いだ高柳である。三島由紀夫と太宰治を併読してしまった。純文学もライトノベルも愛してしまった。そしてそれに見合つだけ無秩序な小説を書き殴つた。

恐ろしく暇な夜を過ごす囚人仲間は、実に良き批評家であつた。こと、官能小説は重宝された。恋の大泥棒でもある高柳の、豊富な経験から生み出されたそれは実に生々しく、艶めかしく、それでいて後腐れがなかつた。エロ本なんぞ持ち込めない囚人達はエマニエル婦人。少し学のある人間は源氏物語を唯一の慰みにしていたので、高柳の小説は看守達の目の届かぬところで大いに回し読みされて、ついには看守まで読むようになつた。高柳は水を得た魚よろしく、ひたすら執筆を繰り返したが、やがて一端にスランプに陥つた。どんな分野でも、スランプというものは必ず存在する。そしてそれは例に漏れず、新たなるステップへの扉である。

高柳は目覚めた。三島と太宰を併読したことを悔やみ、ライトノベルと純文学を同時に愛したことを恥じた。無秩序かつ無節操な囚人小説家は、ここに己と、己の筆の進むべき道を見いだした。

高柳は再び本を読み漁つた。元より盗むのは得意である。女流作家の纖細な表現を盗み、大家の大胆な構成を掠め取つた。宝石を盗むと怒られたが、宝石よりも美しい言葉を盗んでも、誰も咎めはしなかつた。

囚人仲間は嘆いたが、高柳は己を信じて筆を執つた。恐ろしく暇なはずの夜は瞬く間に明けて、飯を食うのも忘れて筆を奔らせた。相部屋のヤクザはやはり最大の理解者だつた。意のままに筆を驅る高柳の良き編集者になつた。

やがて、囚人仲間が何人か婆娑に出て、何人かくたばつた頃に、ようやく高柳の小説は完成した。

「これが俺の本当の処女作だ」

そう言い切つた、新生高柳の生み出したのは、大衆小説だつた。シンプルなストーリーはわかりやすく、それだけに巧緻かつ大胆な

文章が映えた。天下の大泥棒の躍動感溢れる大活躍は、今でも敬愛するルパン三世の如き爽快な気分を与えた。一方で繰り広げられる大恋愛は、ハーレクイーン以上に陳腐であつたが、思わずホロリと来てしまう出来だった。

ヤクザのお墨付きで某社に送られた原稿はたちまちのうちに文庫化してベストセラーになり、獄中にてありがたい賞まで頂いてしまつた。

高柳は自身を獄中小説家と名乗り、刑務所の中からいくつものベストセラーを世に送り込んだ。せっかく模範生として婆婆に戻れる事になった後も、「俺はここのはうがいい。ここに置いてくれ」と駄々をこねて刑務所に居座つてしまつた。ヤクザは社会復帰した後は稼業を退き、高柳の専属編集者となつた。

かくして世紀の大泥棒と謳われた高柳昌彦は世界でただ一人の獄中小説家として、今でも数多の読書家の心を盗んでいる。

(後書き)

拙作を読んで頂き、ありがとうございました。
御批評、御感想をお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9503b/>

前略、堀の中から

2010年10月8日14時25分発行